

巻頭言
Greeting

×

鞭木 由行
Yoshiyuki Muchki
聖書宣教会
研究図書主任・図書館長

Profile

聖書神学舎卒業後、茨城県の小川キリスト教会で3年間、神奈川県の上田丘の上教会で19年間牧会。2006年より聖書宣教会会長、2009年より校長、現在特任教師。



「神の指図」

神は濃い雲に水気を含ませ、雲がその稲妻を放つ。それは神の指図によって巡り回り、事を行う。神が命じるすべてのことを、世界の地の面で。神は、懲らしめのため、ご自分の地のため、または恵みのために、これが起こるようにされる。(ヨブ記 37 章 11-13 節)

これは、ヨブの友人エリフのことばである。若輩であるがゆえに、じっと黙って論争を聞いていたエリフが不毛な論争に我慢仕切れなくなり、ついに語り出すところは、ヨブ記の転換点となっている。それまでの重苦しい堂々巡りの議論を封じ、生き生きと神のみわざを活写するエリフのことばによって、読者は開かれた天の窓へ導かれる。雲に水気を含ませ、その雲が稲妻を放つのは、神の指図によることである。その目的は、懲らしめのため、また恵みをもたらすためである。一切の自然現象は、神の御手の業であり、御口の息吹の所産である。例外はない。

これは最近の感染症でも同じ事であろう。感染症の専門家によれば、古来から感染症は歴史の転換を引き起こしてきた。14世紀のヨーロッパを襲った黒死病は、一方でそれを防げなかった教会の権威を失わせ、他方で人々の意識を国家へと向けさせ、結果として封建的身分制度が崩壊していった。16世紀の南北アメリカ大陸では麻疹、天然痘、結核によって人口の八割を失い、スペインを中心とする別世界が出現した。20世紀初頭のスペイン風邪の流行後はアメリカ中心

の世界を生み出していった。

今回の感染症がどのような世界を生み出すのかは未知であるが、すでに明らかになったひとつのことは、ネットへの依存である。ネットはすでに深く社会に根を下ろしていたが、ここに来て教会も一気にネットに依存することになった。コロナとネットで、教会は二重の重荷を課せられている。これがもたらす変化はかなりのものになるのではないかと案じられる。教会の交わりを例にとると、教会の交わりとは「有機的」な交わりである。パウロが教会を「からだ」に例えたとき、彼は教会というものを会員一人ひとりが相互に有機的に結び合わされた共同体と考えていた。しかし、有機的交わりの中に何かが介在することによって、その結びつきは、部分的であるにせよ機械的なものになり、本来の交わりが失われる。さらにネットによって空間(地域性)が奪われ、もはや集う必要はなく自宅で礼拝に「出席」(?)することが可能になった。すべては神の指図によると認めたと、これは懲らしめのためなのか、または恵みのためなのか、教会は何を神から問われているのかと考えさせられる。

No.182 Topics

- p03 リトリートの恵み
- p04-05 新型コロナの時代を生きる
- p06 研修生の学びの証し
- p07 学びの窓

赤坂 泉

Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

神の御名はほむべきかな。
とこしえからとこしえまで。
知恵と力は神のもの。
神は季節と時を変え、
王を廃し、王を立てる。
知恵を授けて賢者とし、
知識を授けて悟りのある者とされる。

(ダニエル 2:20~)

感謝を数えて

コロナ禍にあって、全知全能の統御者である神の御手の中に生きる幸いを感謝し、御名をあげます。全世界の隅々まで影響を及ぼしているコロナ禍です。皆様はどのような状況に直面しておられるでしょうか。御手の守りを祈り、学舎にある神の恵みの感謝をお分かちします。

まず、一ヶ月遅れで開始し、異例の対応を重ねた前期が無事に終わったことです。礼拝や祈祷会のあり方も教会奉仕の実態も、学びも研修生活も、隅々まで影響を受けました。コロナ以外の健康課題もあれば、不安や不便もあるにしても、研修生・教職員一同、守られてなすべき務めに集中できました。オンラインの授業や会議も、長短あるにしても幅広く活用できました。対面の交わりが大きく制約される中、ささやかな工夫も重ねられています。別記のリトリートもその一つです。恵みに支えられています。

11月の恒例のオープンデイにも賛美礼拝にも自由に外来者を歓迎するというわけに行かず、オンラインの見学や参加をお願いしました。制約の多い方法ではあっても、これらの機会を持てたことも感謝です。

ただ、恵みの中に課題も山積です。特に人的・財的な守りを祈りください。

新年度への祈り

新年度の入会志願の受け付けが始まっています。伝道者の不足は顕著で、教会のたたかひも厳しいものがあります。主の召しの器たちが、信頼と従順をもって、速やかに、大胆に召しに応答できるよう、教会の祈りを合わせましょう。

また、聖書神学舎が、主から託された賜物と使命を正しくわきまえて、主と主の教会に仕える働きを進められるようにお祈りください。新入生の導きを祈り、迎える教職員の体制がさらに充実することを祈り、研修生の学びと訓練が実り豊かであるようにお祈りください。

学舎でも同窓生諸師のために、諸教会のために主の守りと祝福を祈っております。

神学教育のこれから

コロナ以前から、第四次産業革命だ、ソサイエティ 5.0 だ、LIFE3.0 だ等々のラベルで、時代の革新が叫ばれていましたが、コロナ禍を機にオンラインの活用が日常に急浸透しました。IT から ICT へ、AI から AGI へ、VR や AR だけでなく MR も SR も、といった流れは、5G に支えられてさらに加速するのでしょうか。敢えて英文字ばかり並べましたが、こうした概念や技術について知らぬ顔を決め込むわけには行きません。あっという間に日常生活に不可欠のものとなり、情報や教育の前提も激変すると思われるからです。

どのような技術にも、神の視座からの検証が肝要です。例えば、リモートの「交わり」が全人的な参加を要求せず、人と人との交わりの有り様が変容するとなると、生ける神との「人格的な交わり」の概念が変質してしまうのではないのでしょうか。技術をどう理解し、評価して、どのように用いていくのか、分別と智恵を祈り求めます。

今後の神学教育のあり方について、本質的にも実務的にも数多の検討課題があります。主に聴くことを大切にしながら前進してまいります。

02 リトリートの恵み Retreat 2020



コロナ禍の「交わり」と「恐れ」

ひろあき

高石 啓明

聖書神学舎本科3年

研修生会の企画・アルバム係として、今年の聖書宣教会のリトリートを準備させていただきました。今年は研修生同士が交わる機会も少なく、このリトリートが実際の交わりの機会となり、同時にこれからの交わりについて考え、学ぶひと時となることを願いつつ準備しました。

準備するにあたり、様々な恐れがありました。というのも研修生同士やそのご家族、先生方の間にもコロナへの意識の差があることを強く感じていたからです。さらに台風の接近で1日目の外でのプログラムも難しくなると心配しましたが、当日の天候は守られ本当に感謝でした。ドキドキしながら迎えたリトリートでしたが、なんとか知恵を絞り出し、感染対策に気を配りながらも交わりのための時間をとりつけることができたのではないかと思います。

リトリートの最後に静思の時を持ち、未来の自分(一年後)に手紙を書くというアクティビティをしました。祈りの中で、自分が不安や恐れにとらわれやすい者だと改めて示されました。リトリートを準備している時もそうでした。そんな私だからこそ、自分への手紙の最後には「恐れるな」という主のことばを思い出すように書き送りました。

「もう一度召しに立ち返る」

いさんぶ

李 相扶

聖書神学舎本科2年

今回のリトリートは、コロナウイルスの影響で、日帰りの2日になりましたが、その制約の中でもリトリートの目的を十分に達成する機会でした。というのは、互いに貴重な交わりを得て、自分の召しをもう一度考える事ができたからです。

一日目は主に野外活動でした。先にフェローシップと食堂で集まって、鞭木先生による交わりについての奨励があり、聖書(使2:42)から交わりの大切さを語ってくださいました。その後、みんなで花木園という公園に出かけました。行き帰りの車、食事、ゲーム、毎日にチームのメンバーが変わり色々な人と楽しく交わりの時間が持たれました。

二日目は室内活動として、フェローシップと食堂で集まりました。礼拝に集まる事が困難な今の時代にどうすれば良いのか、グループ別にディスカッションの時間を持ちました。また、津村先生と赤坂先生の救いと召しについての証しを伺い、過去の大変な経験と今までの恵みを教えていただきました。その話を聞きながら、私に対する神の召しと導きをもう一度考えさせられました。

その後、未来への手紙を書く時間がありました。自分を励ましつつ、未来の期待を抱きながらこれからの歩みを備える時間となりました。

主の御名を賛美いたします。学び舎がこれまでのところ、新型コロナウイルスの集団感染から守られていることを主に感謝しつつ、研修生活における感染予防の取り組みについてご紹介します。春先の調整期間延長を経て、オンラインを中心とした授業や礼拝が開始される一方で、対面での研修生活の段階的な再開を目指して、色々なアイデアの検討と試行を繰り返して来ましたが、夏前にはおおむね以下のような現在のスタイルに落ち着きました。

研修棟(教室・図書館・チャペル)に入館する際には、入口で検温結果を記入し、手指のアルコール消毒を行ってから入館します。発熱(37.5度以上)や疑わしい症状がある場合は、入

手指を消毒してから使用するようにしています。

生活棟(1階食堂・2～3階単身寮)においても、消毒や換気の手順、またマスク着用などのルールは研修棟に準じて実施しています。食事の際には同一テーブル内での対面を避け、隣席との間も一席ずつ空けて着席しています。料理や飲料も専用のスペースで取り分けるようにし、衛生面に配慮しています。食堂の収容人数を減らしているため、現在は単身寮生を中心とした食事の交わりが続いています。

研修生会活動(研修生同士の交わりや学び舎の運営を分担する各種の奉仕)も、屋内で集まる場合は3密を避け、可能なものは屋外での活動(ウォーキング・校地整備など)に振り替えたり

学び舎での対応 Measures Taken at the Seminary

館を控えるようにしています。研修棟内はマスクの着用を義務付けています。

教室やチャペルでは前後左右の間隔を1m以上空けて着席できるように、机とイスの配置を工夫して、対面での授業や礼拝が行われています。各室の面積に応じて人数制限を設けており、受講人数によって教室を使い分けています。各室の使用中は、部屋ごとに指定された方法で窓を開け、機械排気を併用しながら、室内の常時換気に努めています。使用終了後は各自が使用した範囲(机・ドアノブなど)を消毒してから退室します。加えて、当番による従来の清掃活動に消毒作業を追加し、人の手が触れる範囲の消毒を徹底しています。直接消毒ができないもの(共用のパソコン・コピー機・図書館の書籍など)については、備え付けのアルコールジェルで改めて各自の

もしています。毎日のコーヒータイムは中止していますが、天気の良い金曜日の午後などに、屋外にテーブルを出して実施することもあります。

単身寮生は2人部屋での生活が基本ですが、長時間にわたる接触を避けるため、空室を活用して、就寝時は1人部屋にしています。教会奉仕等で公共の空間から帰寮した際は、速やかな入浴・更衣・手持ち品の消毒(除菌シートで拭く)を義務付けています。

以上がおもな取り組みですが、集団生活である以上、感染リスクは常にありますので、引き続き細心の注意を払って行きたいと思います。

諸教会が感染から守られますよう、研修生一同、毎日の早天祈祷会でお祈りしています。

谷口 真樹

聖書神学舎本科3年

私が通っている奉仕教会は、10月から会衆を6グループに分けて分散礼拝を行い、感染対策を行いながら毎週聖餐式を行っています。これでひと月半に一回は会堂で礼拝をささげ、聖餐にあずかることができるようになりました。6グループに分けると集まる人数が少なくなるのではと思うかもしれませんが、しかし、教会は都内にあり、会堂も決して広くはないので、感染予防のためにはこの規模が適切であるという判断です。教会内でも様々な意見がありましたので、まとめることは容易なことではなかったと思いますが、この判断が用いられるように祈っています。

教会はこれまでオンライン礼拝が半年ほど続いている状況でした。7月の上旬に一度会堂に集まっての礼拝を再開しましたが、その後すぐに感染者が急増したため、2週間で再びオンライン礼拝に戻ってしまいました。そのため「集まって礼拝をささげる」という、これまで当たり前と思っていた恵みの大きさを今改めて噛みしめています。

教会の交わり

吉田 知基

聖書神学舎本科3年

私の奉仕教会は家の教会であるため、密になりやすい環境にありました。そのため当初はYouTubeを使ったオンラインによる礼拝をささげていました。しかし、交わりという観点から双方向でお互いの顔を見ることのできるZoomによる礼拝に切り替え、礼拝後にしばらく互いの近況報告や祈禱課題を分かち合う時を持つようにしました。祈祷会もZoomに切り替えたところ、これまで距離的に教会に集まるのが困難であったメンバーも集うことができ、交わりを深める機会となりました。さらにLINEなどのSNSアプリを通じて連絡を取り合うようになり、以前よりもお互いのことを知ることができるようになりました。現在は教会外からのZoomを残しつつも、家の教会の中においても、いくつかの部屋(礼拝堂、食堂、牧師室など)に分散して、Zoomで各部屋をつなぎ、感染予防対策をしながら出来る限り集まっています。

奉仕教会での対応

Measures Taken at Places where Students Serve

菅野 雪

聖書神学舎本科1年

毎週土曜日の夜にZoomで行なっています。時間は45分で、スタッフは5人、週替わりで司会を担当しています。内容は、聖書の時間とゲームタイムの2部構成です。賛美は、リードの人以外をミュートにして、それぞれで賛美しています。声を合わせて賛美できない寂しさもありますが、今できる最大限を主にお捧げできればと思うようにしています。集中力を持たせることに課題を感じていますが、心がけていることは、一方通行のコミュニケーションにならないこと、メッセージはなるべく短い言葉で伝えることです。手探り状態で来ていますが、スタッフ間でよく意見を交換し合い、工夫しています。みんな初めての事なので、よく話し合い、より良いと思ったやり方を、柔軟に取り入れていくことは必要なことだと思いました。また、実際に会って話せなくなってしまった分、今まで以上に中高生たちのために祈らなければいけないと思われています。

オンラインキャンプ

吉村 直人

聖書神学舎本科3年

今年の夏はオンラインでのキャンプ開催が多かったように思います。私自身も複数のオンラインキャンプに参加でき感謝だったのですが、その中で最も大切だと感じたのは「準備側の本気度」ということでした。これは普段のキャンプでも勿論なのですが、オンラインでは顕著に表れていました。どれだけ細かいことに目が行き届いているかということです。例えばある100人規模のキャンプでは「グループタイム」を小まめに(効果的に)入れて、キャンパーが雰囲気からこぼれないように工夫がされていました。後で聞いたのですが、各グループリーダーがメンバーの情報を事前に知らされ、祈り備えてこの時間を導いていたということでした。これは準備側がよく祈り、時間をかけてあらゆる想定をした結果だと思います。このキャンプでは信仰告白をした未信者の方も起こされました。オンラインには難しさもありますが、可能性も感じた夏でした。



主によって召しされたということの確認

あゆむ

大橋 歩

聖書神学舎本科3年

今年度の前期が終わりました。今年はコロナの影響もあり、例年とは全く違った状況の中での学びでした。いつから学びが始まるのか、オンラインでの学びは果たして可能なのか、多くの心配がある中での前期でしたが、ひとつひとつの課題がクリアされて、学びを続けることができました。振り返ってみるとあっという間に終わってしまったという感覚です。

この2年半を振り返ってみると、聖書宣教会での学びを通して、自分が主によって召されたのだという事実を何度も何度も確認させられる日々でした。

それは自分を知るとのこと、自分の至らなさや向き合うことでもあります。学びが進み、深まっていくにつれて、自分がいかにわかっていないのかということに気づかされ、向き合わされます。また課題の難しさや多さに、とても自分にはできない、自分はなんて弱いんだと思わされます。そして周り自分と比べ、へこみます。自分は果たして主の召しにふさわしいのだろうかと思えます。

ですが、そんな時思われるのは、「主が私を召してくださいました」ということです。確かに自分の力ではどうすることもできない。とても主の召しにふさわしい立派な者ではない。そんな自分をなぜ主は召しておられるの

だろうかと考え、祈られる時、「主が」私を召してくださいているということに気づかされるのです。自分の力で立っているのではなく、主によって召されて、主によって立たせられているということに気づかされるのです。そして主のあわれみのゆえに学びを続けることができていることに感謝し、力を得てまた学びへと向かうことができます。

学びを導いてくださる先生方、職員の皆様、同学年の仲間、先輩、後輩の研修生、支えていてくれる家族、そのすべてを主が備えていてくださるからこそ、今の学びがあることを覚えさせられます。

また、日々の歩みが皆様の祈りによって支えられていることを改めて感じさせられました。いつもお祈りいただき、ありがとうございます。

こんなコロナの影響の中にあるからこそ、この学びが主によって与えられていること、主の召しのゆえに聖書宣教会での学びが与えられていることを改めて覚えさせられます。そして主がともにいて支え、導いてくださることに感謝します。

神は仰せられた。「わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。このわたしがあなたを遣わすのだ。…」(出エジプト記3章12節)

積義に関して

横山 昌英
Masahide Yokoyama
聖書神学舎 教師

この度の新改訳 2017 で、1テサロニケ2章7節の「優しくふるまいました」が「幼子になりました」に改訳されました。以前、新約が底本としていたネストレ・アーラント（以下 NA）24版ではエーピオイ（ēpioi= 優しい）が本文にありましたが、その後の研究を踏まえ、25版以降はネーピオイ（nēpioi= 幼子）を本来の読みとしています。

改訂ゆえに文意が難しくなったのは事実です。従来の「優しく…」なら、続く「母親」（直訳は乳母）へ円滑につながります。一方「（私たちは）幼子になりました」ですと、かなり飛躍した記述となってしまいます。

「幼子」の採用によってもたらされる「混同した隠喩（mixed metaphor）」の問題は、パウロ批判へと傾斜します。本文批評の権威者であるメツガーは学者たちを代弁するかのようになり、これは同一の文章における「乱暴な移行」であり、「不合理に等しい」と述べます。「幼子」の連想から、次は信徒を養育する「母親」へと「持ち前のすばやい思考で彼は比喩を一転させ」たのだと。このような比喩の展開は、「全くパウロ一流のやり方」とまで断じます。（『新約聖書の本文批評』233頁以下。一部私訳）

この見解に異を唱えるのが近年の Weima の注解です。彼は7節の構文に着目し、前半の「（むしろ）幼子になりました」は、ou … alla～（…でなく、むしろ～）構文の後半として5節以下の5つの ou(te) と結びついている。一方後半の「…母親のように（hōs）」は、「(houtōs: そのように) あなたがたをいとおしく思い」が受けて、8節前半と結びついている。つまり、「幼

子…」と「母親…」は同一の文章でなく、それぞれ別の文として解すべきである、と。

NA が提唱する句読点に因われず、ギリシャ語の構文を踏まえた Weima の考察は「混同した隠喩」問題に解決を示した点で評価されます。それでも、「幼子」から「母親」への唐突さは十分説明し切れていないように感じます。（“1-2 Thessalonians” BECNT, 184頁）。

これについてアウグスティヌスは、あくまで「幼子」と「母親」の関連を追求した、興味深い解釈を提示します。「乳母」が、わが子への愛情ゆえに「幼子」の目線に降りて赤ちゃん言葉で話しかけるように、パウロたちは入信間もないテサロニケ教会員に合わせた—それが「幼子になりました」の意味だと解くのです。（『ヨハネによる福音書講解説教』第7説教）もちろんこれが本節の正しい解釈か否かについては検討の余地があるでしょう。

みことばの解釈のために、歴史的・文法的積義が最優先されます。しかし、積義は万能ではありません。上記のアウグスティヌスの解釈は、その是非を超え、解釈者自身の人生経験や洞察力、要は人としての成長も聖書解釈の無視できない要素であることを暗示しています。聖書を扱う以上に、みことばに扱われる大切さを問いかけていると思うのです。

神学舎でもオンラインによる授業が実施されました。学び舎が重んじてきた全人的な教育に、今後どんな影響が及んでいくのか否か…そんなことに関心を寄せています。

○ 図書館から — 伝記のすすめ —

鞭木 由行

Yoshiyuki Muchiki

聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

暫く前から「牧会学Ⅴ」のクラスを通年で担当するようになり、そこでは牧会で生じる様々な具体的な(現実的な!)諸問題を取り上げて考えるようにしている。このクラスの前期の課題として伝道者・牧師の伝記を読んで分かち合う時間を設けている。残念なことにあまり良い伝記が出版されていないことに気が付かされているし、あっても絶版のことが多い。牧師として伝記を読むことの大切さを強調しているが、出版関係者の話によると、伝記は一番人気のない(つまり売れない)種類の書籍だそうである。勢い日本語で読める伝記が限られてくるのは残念なことである。神学校の図書館として、大事な要素は、研究と同時に神学教育を行うために必要な文献を集めることにある。つつい學術的な文献の蒐集に向かってしまう傾向があり、勿論それはそれで重要でありながら、同時にもっと教育的分野でも充実が必要だと思っている。伝記も、図書館ではなかなか見つけることが難しい。ところが昨年からは図書館が購入した新刊書や寄贈書を分類する担当者となって、初めて気が付いたことがある。現在の図書館の分類では「伝記」ということで、一括検索することはできないということである。それはあるものは年代順に分類され、かつ国別に、さらに分野別に分類されている。従って人物で検索する以外にないが、書名には人名が登場しないものもある。伝記を探す場合はその点をお忘れなく。

○ 近況と祈りの課題

- 研修生一同、コロナ対応のさまざまな不規則の中も守られて、学びと訓練にいそんでいます。来春は9名が卒業予定です。卒論・卒研の取り組みを始めとする後期の学びの祝福をお祈りください。新しい研修生会三役、各寮長などがよくその務めを担えるように、研修生活の祝福もお祈りください。
- 新入会生の導きを祈っています。主が起こされる献身者たちが、それぞれの賜物と使命に最適な神学教育の場へと導かれるように祈っています。その中で、聖書神学舎に主が託して下さる方々との出会いを楽しみにして、祈っています。
- 教職員一同も新しい経験に戸惑いながら、工夫を重ねながら、主に仕えています。健康と働きの祝福をお祈りください。
- 後期も聴講生を広くお迎えすることができませんが、諸教会の必要に鑑みて、部分的に門戸を開きました。聴講制度をどのように用いていくのか今後の課題です。
- 拡大教育は後期もオンライン聖書講座を提供しています。教師会では、今後の拡大教育の可能性、継続教育の可能性について考えています。
- 聖書学研究所の働きのためにお祈りください。ウェブサイトには活動や研究テーマなどについて簡潔に報告しています。
- 聖書宣教会の経済的な必要のためにお祈りくださることを感謝します。コロナ禍にあつて諸教会、皆様にも闘いの大きいことと思います。ともに主を仰ぎ、主の供給に信頼したいと思います。